



TITLE:

第3章 京都大学北部構内BB28区の 発掘調査

AUTHOR(S):

清水, 芳裕; 古賀, 秀策

CITATION:

清水, 芳裕 ...[et al]. 第3章 京都大学北部構内BB28区の発掘調査. 京都大学構内遺跡調査研究年報 1997, 1993: 41-52

ISSUE DATE:

1997-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/226868>

RIGHT:

第3章 京都大学北部構内 BB28 区の発掘調査

清水芳裕 古賀秀策

1 調査の経過

本調査区は、京都大学北部構内の西南隅に位置する（図版 1-217）。周辺の先史時代の遺構は、東側の 6 地点で弥生前期の遺物包含層が確認されているほか、約 100 m 北方の 109 地点で弥生前期末の土石流、54 地点で弥生中期の方形周溝墓が明らかにされている。また歴史時代の遺構としては、54 地点で鎌倉時代の火葬塚、109 地点で平安時代の柱穴群と溝および幕末期の瓦溜などがある。また、南に隣接する 208 地点では、平安時代の埋納遺構や建物跡のほか、幕末期の土佐藩邸の南を限る堀が発見されている。

ここに、理学部動・植物学校舎の第2期新営が計画されたため、以上の周辺地区での調査成果と、1991年度の試掘調査の成果を勘案し、予定地全域 1323 m² の発掘調査を実施した。調査は1993年 6 月15日に開始し、9 月30日に終了した。

調査の結果、旧建物の基礎によって調査区の東南部を大きく破壊されていたが、平安時代の溝や建物跡の可能性のある方形の土坑、中世の粘土敷き土坑・土取り穴・溝や近世の野壺や溝を発見したほか、調査区のほぼ全域に広がる先史時代の土石流の跡を確認した。また、理学部地質・鉱物学教室の協力を得て、黄色砂以下の土層の分析をおこない、地震による堆積層の乱れと噴砂の跡を検出した。

2 層 位

調査区の地表面の標高は、62.3～62.6 m を示し、北から南、東から西へわずかに傾斜する地形である。基本的な堆積は、上から表土（第1層）、灰褐色土（第2層、第6層）、茶褐色土（第8層）、黒褐色土（第9層）、黄色砂（第11層）、土石流（第12層）であり（図23）、さらにその下に黒褐色粘質土と砂礫を確認している。

灰褐色土Ⅰ（第2層）と灰褐色土Ⅱ（第6層）は近世の耕作土で、2層の間には、調査区西半の Y=2423 付近以西では床土層と思われる灰赤褐色土（第3層）を、また東半では灰赤褐色土に砂や砂礫の混入した層（第4層、第5層）をともなう。南に隣接する 208 地点の調査で検出された棚田状の造成の跡〔浜崎ほか95〕は、本調査区では認められなかった。茶褐色土（第8層）は古代から中世の遺物包含層である。Y=2425 m 付近に低い

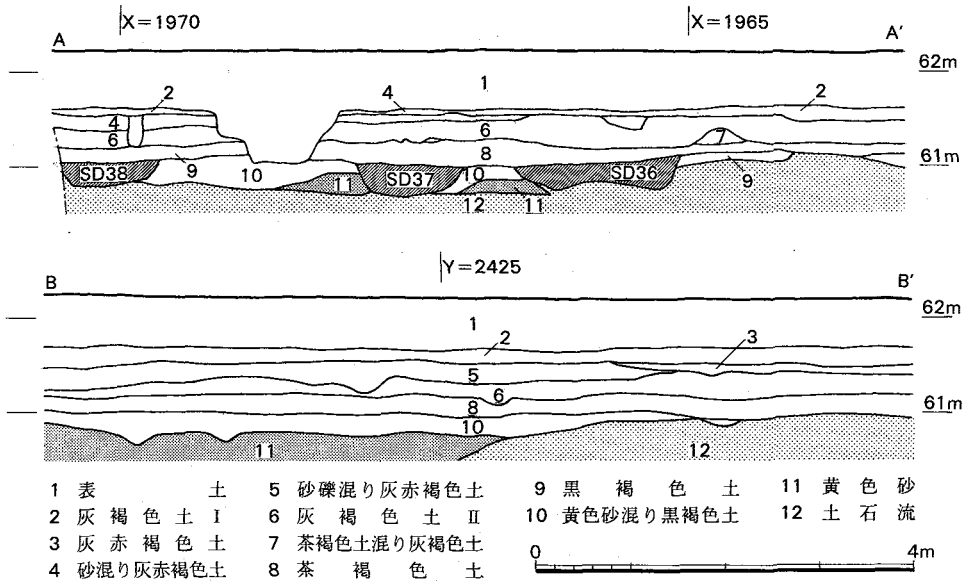


図23 調査区の層位 縮尺1/80

段差が認められ、東側がやや高い。下層は10世紀代の、上層は12～13世紀代を中心とする遺物が多数出土する。また黒褐色土（第9層）は古代の遺物包含層で、9世紀代の遺物が少量ながら出土する。

第12層は人頭大の花崗岩礫が混じる砂礫であり、調査区のほぼ全域に認められた。土石流の跡と思われる。黄色砂は、弥生前期末～中期初頭ごろの洪水による堆積層であることが従来の調査から判明している。下面から、縄文時代後期と晩期の土器片（Ⅱ1、Ⅱ2）が出土しており、洪水の時期と矛盾しない。黄色砂は、下層の砂礫を巻き込みながら堆積していたが、土石流による砂礫の上面が高い場所にはみられず、堆積がなかったか、もしくは中世に削平されたものと思われる。

調査区の北東隅部の標高 59.0 m と調査区南辺やや東よりの標高 59.4～59.7 m の位置では、黄色砂の下部に黄色砂混りの黒褐色粘質土が、わずかながら認められた（図25粗い梨地部分）。黒褐色粘質土上面で東西にはしる亀裂を検出した。垂直断面で観察すると、黒褐色粘質土下層の砂が、黒褐色粘質土中を分岐しつつ水平に広がって堆積しており、この一部が亀裂をともなって、黒褐色粘質土を貫き上部に噴出していた。また、黄色砂層の断面で、同層を構成する薄微な堆積層が波状に褶曲する乱れを検出した（図版16-3）。これらの現象は、地震にともなう堆積物の圧密液状化の跡である。

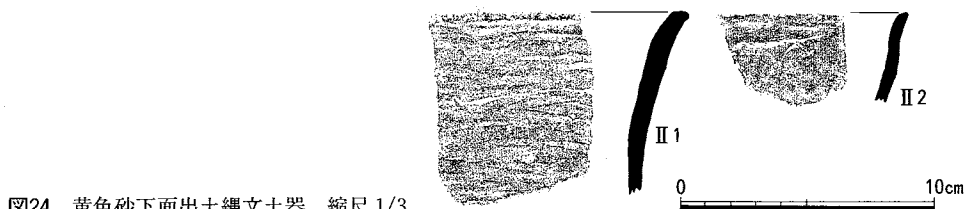


図24 黄色砂下面出土縄文土器 縮尺 1/3

3 遺 構

(1) 古代の遺構 (図版15, 図25)

検出した遺構には、土坑 SK22, 溝 SD36～SD40 がある。

土坑 SK22 調査区の西端に位置する。黄色砂を掘り込んだ、平面隅丸方形の土坑である。平面は一辺 3.5 m, 検出面からの深さは 60 cm を測る。埋土は茶褐色土を中心としたもので、一部に黒褐色土が混入するほか、遺構の北辺と南辺の底部に、黄褐色の粘土塊が貼りついていて、このうち北辺の粘土塊の中心部は、熱を受けたと思われる変色していた。土坑底面の中央部やや北寄りの位置に、深さ約 30 cm の柱穴と思われる掘り込みを検出したが、ほかには明確に柱穴と考えられるものはない。この遺構の用途は不明だが、埋土から土師器の甕片 (II 11) が出土していることや、隅丸方形を呈す平面形状からみて、建物跡の可能性がある。出土遺物からみて、9 世紀ごろの遺構である。

溝 SD36～SD38 黒褐色土上面で検出した 3 本の溝で、茶褐色土を埋土とする。攪乱により、SD36 は 2 つに、SD38 は 3 つに寸断されているが、これらの溝は発掘区の中央北寄りを東西に横切り、ほぼ真直ぐに並行してはしり、両端は発掘区の外へと続いている。このうち SD37 は、埋積後の SK22 を掘り込んでいる。方位は真北から 7° 東に振る方向を示す。断面の形状は、いずれも検出面からの深さが約 30 cm の扁平な U 字形を呈し、底部は黒褐色土層の下に達している。出土遺物からみて、11 世紀後葉ごろの遺構と思われる。

溝 SD39・SD40 発掘区の東寄りを南北方向にはしる小規模の溝で、埋土は黒褐色土である。SD39 は、南に隣接する 208 地点の調査で検出した 10 世紀前葉の溝 SD32 と連続する遺構で、その北の延長部にあたる。北端は攪乱に切られており、全長は不明である。SD40 は、南端を SD37 に接して止まる。これらの溝からは時期を示す遺物は出土しなかったが、埋土や規模からみて近い時期の遺構と思われる。

京都大学北部構内 BB28 区の発掘調査

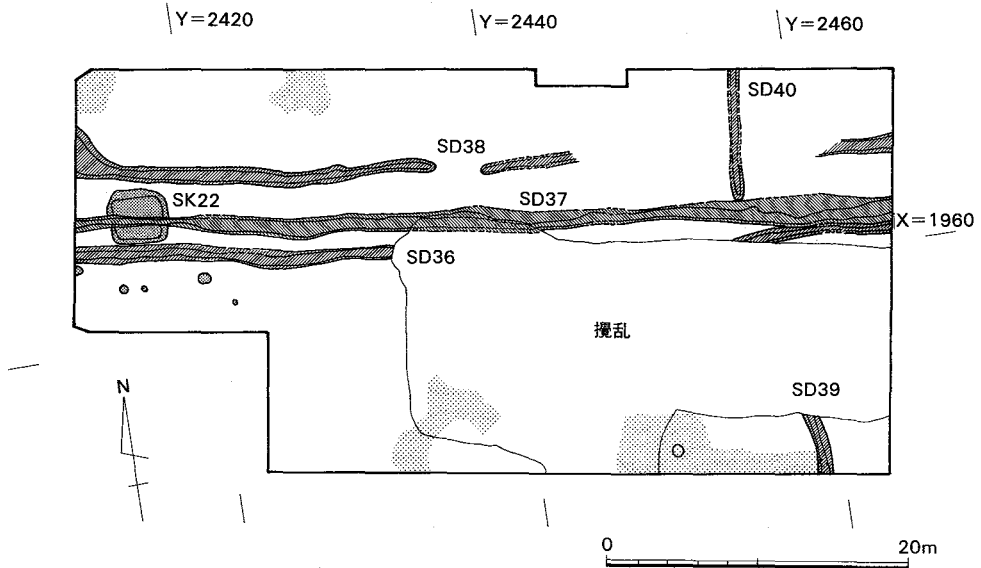


図25 古代の遺構 縮尺 1/500

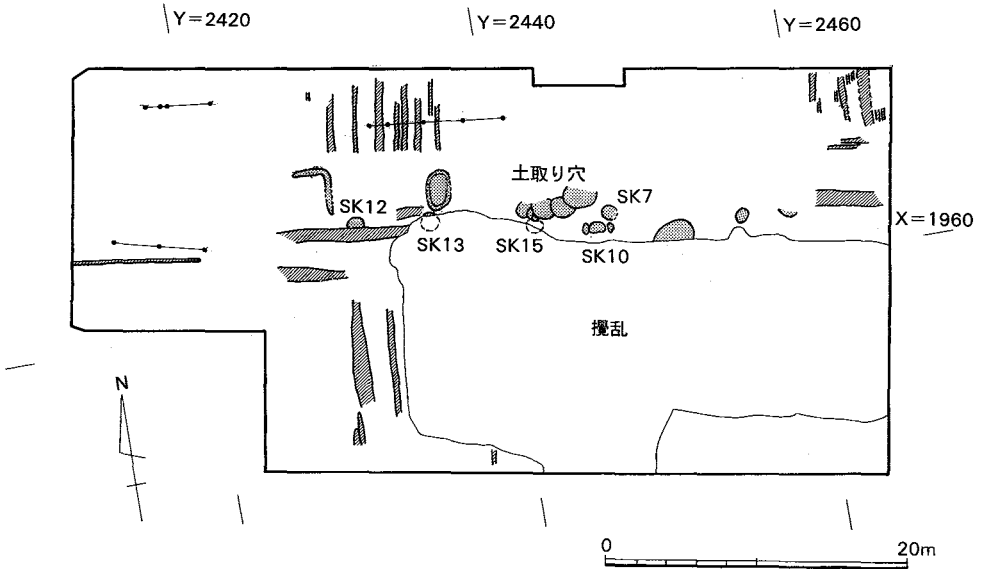


図26 中世の遺構 縮尺1/500

遺 構

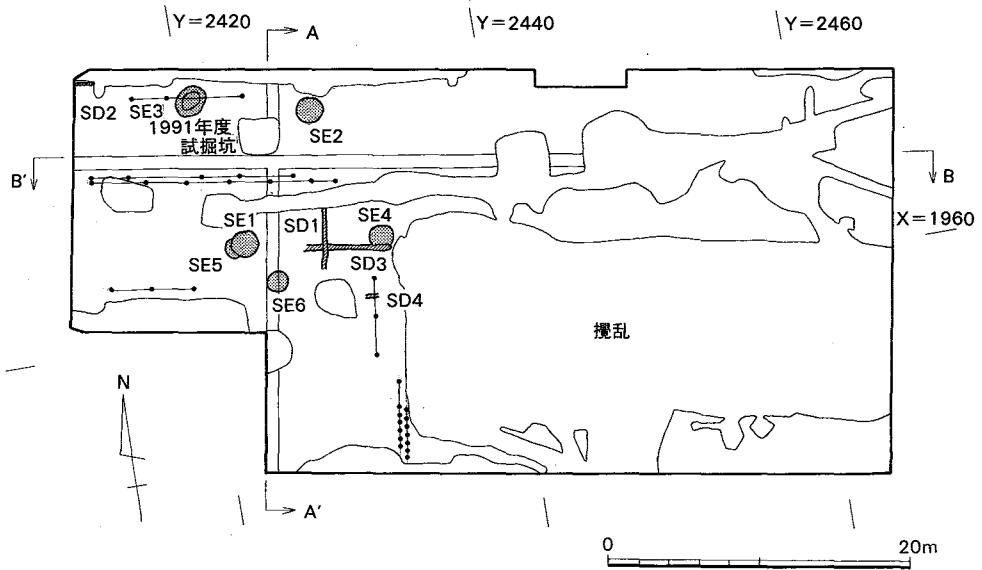


図27 近世の遺構 縮尺 1/500

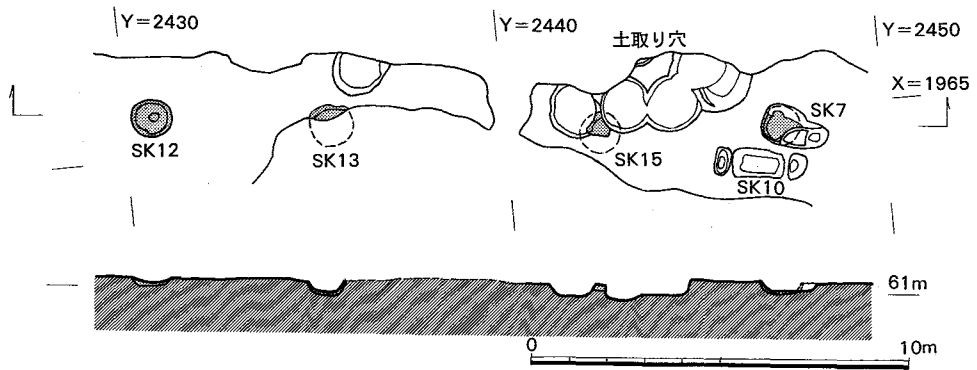


図28 粘土敷き土坑 縮尺 1/200

(2) 中世の遺構 (図版16, 図26・28)

検出した遺構には、粘土敷き土坑、集石土坑、土取り穴、溝、柵列がある。

粘土敷き土坑 発掘区中央部付近の、茶褐色土層中位で検出した。粘土で壁面および底部を整形した4つの一連の土坑である。西から順にSK12, SK13, SK15およびSK7がこれにあたり、ここでは粘土敷き土坑と呼称する。SK12以外は他の遺構や攪乱によって一部を欠失している。SK12は直径約1mの円形の平面形を呈し、他の3つも円形平面に復原できる。いずれも、茶褐色土を深さ20~30cmほど断面逆台形状に掘りくぼめ、内面に塗り込めた黄褐色粘土の上面を、なめらかな凹状の曲面に整形する。これらの土坑は、真北から5°東に振る東西方向の直線上に並ぶ。土坑間の距離は真々で、順に4.7m, 7.3m, 4.7mを測り、遺構間の両脇の距離はほぼ等しい。SK7底部の黄褐色粘土下面には、扁平な形状の大小の石複数個が敷きつめてあった。遺物は、SK7の敷石の間から東播系須恵器片や瓦片が出土しており、13~14世紀ごろのものである。

集石土坑 SK10 茶褐色土層の中位、粘土敷き土坑とほぼ同じレベルで検出した。粘土敷き土坑SK7に近接した南側に位置する。3基の土坑で構成され、中央の土坑は長径1.4m 短径0.7mの平面隅丸方形を呈し、両短辺に近接して小土坑2基が東西に付属する。中軸線の方法は、粘土敷き土坑とほぼ一致する。深さはいずれも40~50cmを測り、東の小土坑の底部は、中央の土坑と連続していた。土坑内には、拳大から小児頭大の礫が密に充填されており、これに混じって東播系須恵器片や瓦片が出土した。これらの出土遺物から、13世紀ごろの遺構と考える。

土取り穴 発掘区中央部付近の茶褐色土層上層で検出した、互いに切り合う土坑群である。西端より掘り始めて、東方向に少なくとも順次4回にわたって掘り進めている。深さは40~60cmと浅い。掘削は底部が黄色砂上層に達した部分で止まっており、茶褐色土と黒褐色土の採取を目的としたものと思われる。

溝群・柵列 溝群は南北または東西方向、柵列は東西方向に並行してはしり、両者ともに真北から約6°東に振る方位を示す。いずれも畑作にともなうものと考えられる。

(3) 近世の遺構 (図27)

調査区西半で、野壺SE1~SE6や溝および柵列を発見した。野壺はSE3のみ素掘で、他は漆喰を用いる。溝と柵列は、東西方向またはそれと直交方向にはしり、いずれも真北から6~8°東に振る方位を示し、中世の耕作関連遺構の方向とほぼ一致する。これらの遺構は、江戸時代後半の耕作にともなうものと考えられる。

4 遺物

(1) 古代・中世の遺物 (図版17・18, 図29・30)

古代の遺物は全体に少量で、遺構からの出土品も限られている。溝 SD36～SD38, 土坑 SK22 および黒褐色土と茶褐色土下層から出土した遺物について記述する。また、中世の遺構にともなう遺物は、集石土坑 SK10 から整理箱 2 箱分の遺物が出土したほかは、まとまったものはない。SK10 と茶褐色土上層から出土した遺物について述べる。

Ⅱ3～Ⅱ6 は SD36 出土遺物。Ⅱ3・Ⅱ4 は赤褐色を呈する土師器皿。Ⅱ3 は「て」字状口縁手法 B₄ 類に相当し、口縁部が弱く外反し器壁が厚い。Ⅱ4 は 2 段撫で手法 C₁ 類にあたり、口縁部形態は強く外反し器壁が薄い。Ⅱ5 は灰釉陶器で、体部内外面とも上半に釉を施す。Ⅱ6 は緑釉陶器で、土師質に焼成され、蛇の目高台をもつ。釉は濃緑色を示す。

Ⅱ7・Ⅱ8 は SD38 出土の土師器皿で、赤褐色を呈す。Ⅱ7 は「て」字状口縁手法 B₄ 類にあたる。Ⅱ8 は 2 段撫で手法 C₂ 類にあたり、口縁部は弱く外反し器壁が厚い。

Ⅱ9・Ⅱ10 は SD37 出土遺物。Ⅱ9 は緑釉陶器。須恵質に焼成されており、外側に小さく踏んばる高台をもつ。釉調は淡緑色。Ⅱ10 は須恵器壺の口縁部である。

Ⅱ11 は SK22 出土の土師器甕である。内面は叩きの当て具痕を残し、外面は刷毛目調整を施す。器面には煤が付着している。

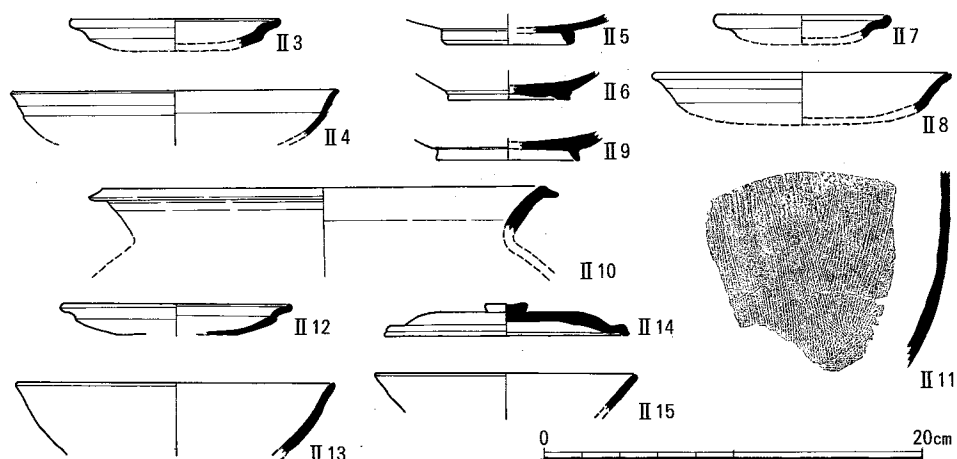


図29 SD36 出土遺物 (Ⅱ3・Ⅱ4 土師器, Ⅱ5 灰釉陶器, Ⅱ6 緑釉陶器), SD38 出土遺物 (Ⅱ7・Ⅱ8 土師器), SD37 出土遺物 (Ⅱ9 緑釉陶器, Ⅱ10 須恵器), SK22 出土遺物 (Ⅱ11 土師器), 黒褐色土出土遺物 (Ⅱ12 土師器, Ⅱ13 灰釉陶器, Ⅱ14・Ⅱ15 須恵器)

Ⅱ12～Ⅱ15は黒褐色土からの出土遺物。Ⅱ12は土師器皿で、口縁部が強く外反し器壁が薄く、「て」字状口縁手法 B₂ 類にあたる。Ⅱ13は灰釉陶器の椀で、体部と内面上半に釉を施す。Ⅱ14は須恵器杯蓋。天井部に凹形のつまみがつく。Ⅱ15は杯。器壁が薄い。

Ⅱ16～Ⅱ29は茶褐色土下層の出土遺物。Ⅱ16～Ⅱ22は土師器である。Ⅱ16は A₂ 類の皿。外面を篋削りで調整し、さらに横撫でを施す。Ⅱ17～Ⅱ20は「て」字状口縁手法の皿。Ⅱ17とⅡ18は B₁ 類、Ⅱ19は B₂ 類、Ⅱ20は B₄ 類にあたる。いずれも赤褐色を呈す。Ⅱ21は黒色土器 A 類の椀。内面と外面口縁部のみ煤が吸着する。暗文と篋削り痕は見えない。Ⅱ22は土師器甕。口縁端部を内に突起させ、頸部の屈曲はつよい。内外面とも横撫で調整を施す。Ⅱ23とⅡ24は灰釉陶器である。Ⅱ23は断面逆三角形の高台をもつ椀。内面のみ黄緑色の釉を施す。Ⅱ24は輪花椀。わずかに外反する口縁部から、体部を内にむかって縦に刻みをいれ、内面に稜を作り出す。Ⅱ25とⅡ26は緑釉陶器である。Ⅱ25は口縁部がわずかに外反する椀。須恵質に焼成され、釉調は濃緑色である。Ⅱ26は糸切りの高台をもつ皿。胎土は軟質で黄白色を呈し、釉は剥離している。Ⅱ27～Ⅱ29は須恵器である。Ⅱ27は杯 A。Ⅱ28は杯 B。外面に斜めの篋記号を残す。Ⅱ29は甕。口縁部が短く直立する。

Ⅱ30～Ⅱ36は SK10 出土遺物。Ⅱ30は須恵器すり鉢。Ⅱ31は須恵器の壺。Ⅱ32は瓦器鍋。口縁部が肥厚し、屈曲はあまい。Ⅱ33とⅡ35は灰釉系陶器。Ⅱ35は椀の底部で、須恵質に焼成されており、断面が丸く低い高台をもつ。残存部分には釉は施されていない。Ⅱ34は青磁椀。釉調は淡緑色で、高台内面のみ露胎である。Ⅱ36は三巴文の軒丸瓦。珠文はない。文様面は扁平で彫りがあさく、周縁部が文様面より突出している。

Ⅱ37～Ⅱ49は茶褐色土上層の出土遺物。Ⅱ37～Ⅱ43は土師器である。Ⅱ43は2段撫で手法 C₅ 類の皿。口縁端部に面取りを施す。Ⅱ37とⅡ42は1段撫で素縁手法 D₂ 類の皿。口縁部形状は直線的である。Ⅱ38は1段撫で素縁手法 D₃ 類の皿。弱く内彎する口縁部形状をもつ。Ⅱ39は淡黄白色を呈する椀。口縁部形状は1段撫で面取り手法 D₅ 類に相当する。Ⅱ40とⅡ41はそれぞれ1段撫で手法の E₁ 類と E₃ 類にあたる。Ⅱ41の口縁部形状は弱く外反する。Ⅱ44～Ⅱ46は灰釉系陶器である。Ⅱ44は口縁部が外側に屈曲し、受部を形作る。古瀬戸窯産の柄付片口である可能性がある。Ⅱ45は古瀬戸窯産のおろし皿。内外面とも口縁部のみ釉を施し、指押さえにより片口を形作る。Ⅱ46は小型の皿。体部は露胎である。Ⅱ47は糸切りの平高台をもつ白色土器皿。胎土の色調は黄白色を呈す。Ⅱ48は小型の白磁皿。口縁端部が外反する。Ⅱ49は須恵器すり鉢である。

遺 物

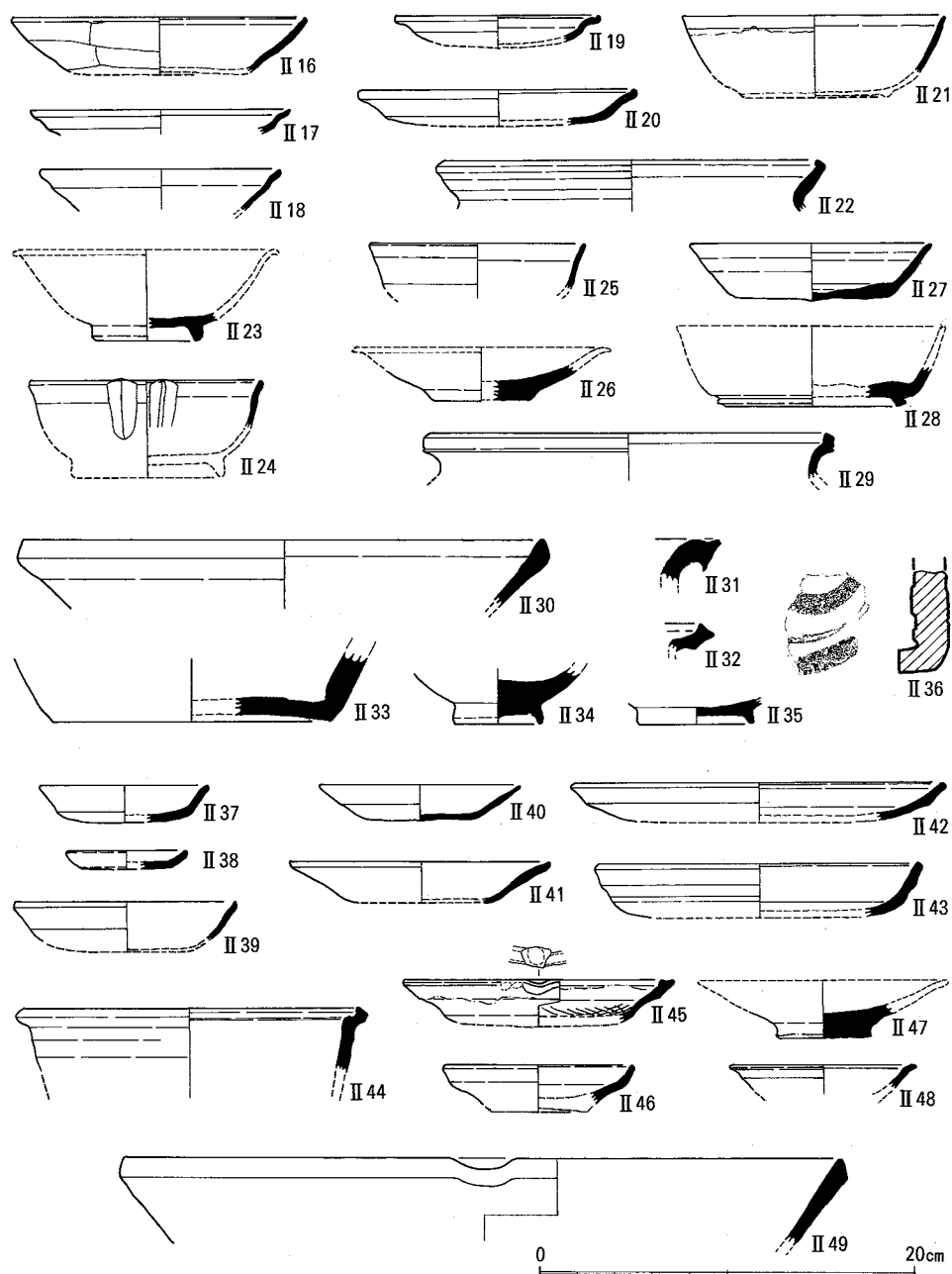


図30 茶褐色土下層出土遺物 (Ⅱ16～Ⅱ22土師器, Ⅱ23・Ⅱ24灰釉陶器, Ⅱ25・Ⅱ26緑釉陶器, Ⅱ27～Ⅱ29須恵器), SK10出土遺物 (Ⅱ30・Ⅱ31須恵器, Ⅱ32瓦器, Ⅱ33・Ⅱ35灰釉系陶器, Ⅱ34青磁, Ⅱ36軒丸瓦), 茶褐色土上層出土遺物 (Ⅱ37～Ⅱ43土師器, Ⅱ44～Ⅱ46灰釉系陶器, Ⅱ47白色土器, Ⅱ48白磁, Ⅱ49須恵器)

(2) 近世の遺物 (図版17・18, 図31)

近世の耕作関連遺構から出土する遺物は少ない。灰褐色土ⅠとⅡは、出土遺物に差は認められないので、以下で区別せずに記述する。

Ⅱ50～Ⅱ54は土師器である。Ⅱ50は型作りのミニチュアの皿で、内面全体に離型剤の雲母が付着する。Ⅱ51は小型の皿。器壁が厚く、胎土は赤褐色を呈する。口縁部に煤が付着しており、灯明皿として使用されていたことがわかる。Ⅱ52は灰白色を呈する皿。口縁部はやや外反し、見込みに圈線がめぐる。Ⅱ53は型作りによる^{ほうらく}胎土は乳白色を呈し、器壁は薄くよく焼き締められている。底部全面に同心円状の突起がめぐり、見込みと外面上半に煤が付着する。Ⅱ54は胴部に鏝がめぐる大和系の土釜の口縁部である可能性がたかい。茶褐色を呈し、頸部の屈曲は強く、口縁端部を内につまむ。

Ⅱ55は信楽窯産の陶器すり鉢。赤褐色を呈し、すり目は6条である。16世紀末ごろのものと思われる。Ⅱ56は陶器灯明受皿。受部の口縁に弧状の欠き込みをもつ。Ⅱ57～Ⅱ59は染付碗。Ⅱ57は外面に菊花散らし文を、見込みには鶴を描く広東碗である。Ⅱ58は見込みに「壽」の文字をあしらう。Ⅱ59は外面に樹花文を描いたくらわんか碗である。Ⅱ60は白磁小杯で、口縁端部がわずかに外反し、高台は露胎である。

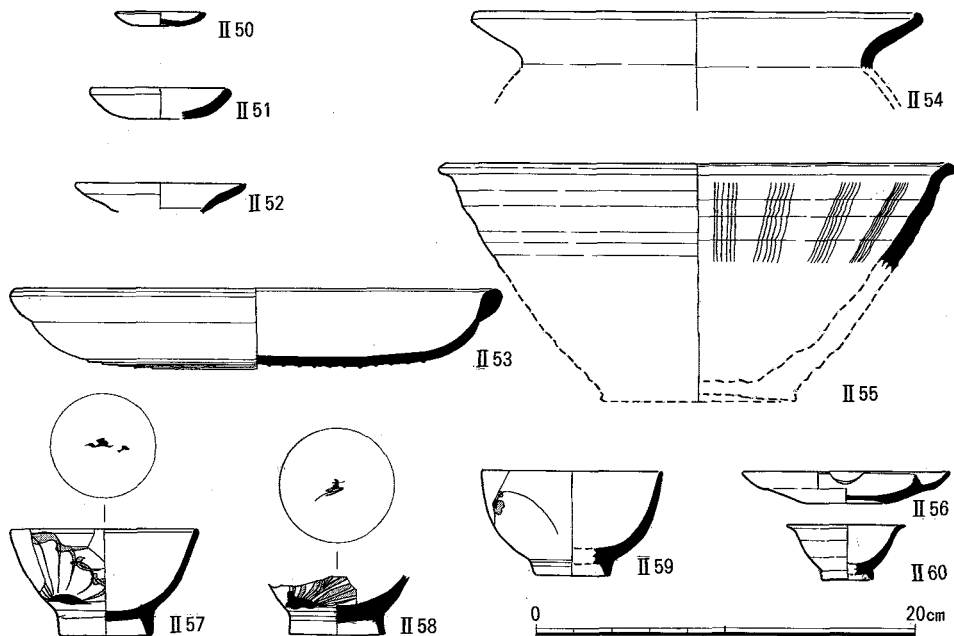


図31 灰褐色土Ⅰ・Ⅱ出土遺物 (Ⅱ50～Ⅱ54土師器, Ⅱ55・Ⅱ56陶器, Ⅱ57～Ⅱ59染付, Ⅱ60白磁)

5 小 結

京都大学北部構内は、北白川扇状地の末端に位置し、北白川追分町遺跡の西端にあたる。北部構内は現在、北西から南西に緩やかに傾斜する起伏の少ない地形であるが、これは弥生前期末～中期初頭の白川の洪水による黄色砂の堆積によって形成されたものである。黄色砂の下には、黒褐色を呈する安定した粘質土層が面的に広がっており、本調査区の南に接する208地点の調査により、弥生時代前期後半の地表面であることが明らかにされている〔浜崎ほか95〕。また、これまでの北部構内の調査の成果から、当時の地表面は起伏に富む複雑な地形であったことが判明しており、地形の復原も試みられている〔泉78〕。

本調査区でこの黒褐色粘質土を確認できたのは、南辺と北辺の一部のみであったが、208地点では、ほぼ全面で検出されている。この位置による違いの要因は、二つの可能性が考えられる。一つは黄色砂の流入時に黒褐色粘質土が削られた可能性で、本調査区で黒褐色粘質土の堆積がほとんどみられないのは、本調査区を南限とする谷状の地形が、黄色砂の流れをより強める作用を与えたものと想定できる。他の一つは、本調査区を通るさらに古い谷状地形がすでにあり、この内側の斜面では黒褐色土は堆積しなかった可能性で、この場合、土石流はこの谷状地形に誘引されたものと考えられる。

土石流は、人頭大の花崗岩礫を含む砂礫の層で、本調査区の東北方約100 mの109地点

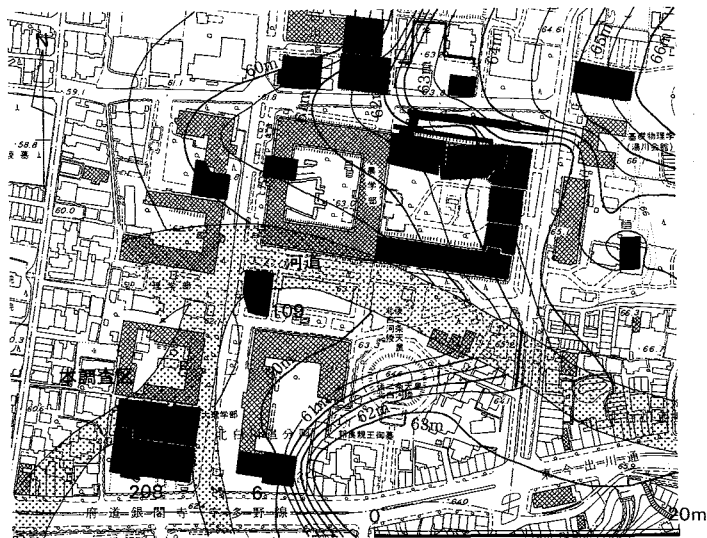


図32 調査区周辺の弥生時代前期の地形 縮尺 1/5000

では、東から西へ流れる土石流の南限を検出している〔浜崎83a〕。弥生時代前期の北部構内南部を横切っていたとされる河道は、109地点の東で傾斜をゆるめており、これより以西は流路が分岐し広がっていたとも想定され、本調査区を通る谷状地形はこの一分路であった可能性も指摘できよう（図32）。土石流と黄色砂層をもたらした白川の洪水は、この谷状の地形をたどって西流し、109地点付近で流路を広げながらも、本流は南下し、本調査区付近を通っていったのであろう。

本調査では、調査区をほぼ真っ直ぐに横切る平安後期の溝 SD36～SD38 を検出した。また南北の溝 SD39 は、208 地点の調査で検出した平安中期の溝 SD32 と連続する。攪乱により不明な点も多いが、平安時代の土坑は溝 SD36～SD38 の南側で検出しており、北側での検出はない。また208地点では、溝 SD32 より東側で確認された遺構はなく、西側では、銭貨や金箔を伴う埋納遺構3基をはじめとする祭祀遺構や、建物の柱穴などの平安期の遺構を検出している。これらの溝群は、当時の土地利用の境界を示していた可能性が強く、溝で囲まれた区画の東北隅が、祭祀に供する場所として利用されたことを考えさせるものである。また、中世前半の粘土敷き土坑や集石土坑は、SD37 の直上で検出しており、遺構の性格は不明であるものの、平安時代の土地区画が中世まで踏襲されていた可能性も指摘できる。

以上のように、本調査により弥生時代前期の地形について新しい知見を得られたほか、北部構内西南部の古代から中世にかけての土地利用状況の一端を明らかにできた。

現地調査は、清水芳裕と古賀秀策が担当し、下坂澄子、矢野由記子、松本篤志、君島英子、大岡由記子、田中葉子が協力した。資料整理は、清水、古賀、下坂、矢野がおこなった。また、現地調査および資料整理にあたっては、梅川光隆氏の協力と援助をいただいた。